



薬局・薬剤師のためのニュースメディア

HARMACY NEWSBREAK

株式会社じほう

©じほう2017

この通信は会員が直接利用される以外、コピー等による第三者への提供は固くお断りいたします

在宅導入コンサルで実績、介護施設も紹介 リブラ 薬剤管理支援ツールでノウハウ提供

2017 薬局経営

調剤薬局を経営するLibra（リブラ、神奈川県）は全国の調剤薬局を対象に在宅の導入コンサルティングを行い、実績を伸ばしている。有料老人ホームなど介護施設での薬剤管理を支援するツールの提供のほか、顧客の薬局周辺にある訪問可能な介護施設を紹介するサービスなどが支持されている。在宅訪問可能な薬局を求めている介護施設は全国各地にあるため、今後も薬局と施設の橋渡しを行っていきたい考えだ。

同社は2012年に設立され、神奈川県内に調剤薬局4店舗を持つ。4年ほど前にオリジナルの薬剤管理ツール「ラーテル」を作成。2年半前から同ツールを活用した在宅の導入コンサルティングを始めている。

コンサル先を開拓する取り組みの一環として、卸数社のMSから在宅への参入や強化を目指す薬局を紹介してもらおう試みにも着手。顧客の薬局はこれまでに、1～2店舗の小規模薬局を中心に宮城県から大阪府まで40社に広がった。最近では「大手や中堅からも、営業力を貸してほしいとの依頼を頂くようになってきた」（代表取締役・的場洋一郎氏）という。

一方で、同社は介護施設運営会社数社ともパイプを持ち、その施設数は約180に上る。「施設の方から薬剤管理を導入したいのだが、どうしたらいいのかという問い合わせが多い」（同氏）。こうした介護施設と顧客の薬局をマッチングさせ、在宅の実施に結び付けている。

●施設職員が配薬する必要なく

同社の強みは在宅で得た多くのノウハウだ。4店舗全店で在宅を実施しており、現在、売上高の20～25%程度を在宅が占める。在宅患者はほとんど施設の患者で、同社のあざみ野店（横浜市）では在宅患者だけでも約250人、伊勢原店（伊勢原市）では約200人を受け持っているという。

薬剤管理ツール「ラーテル」はトレーのような箱にいくつもの升目がある形状で、無償で各施設で利用してもらい、介護施設の負担軽減、配薬ミスの削減に寄与している。升ごとに患者をあてがって名前と部屋番号を記し、一包化された患者の薬を

収める仕組み。同社ではこうしたトレーを施設の階、曜日、服薬機会ごとに用意する。例えば「2階 土曜 夕」のトレーといった具合だ。

一包化した薬包にも名前や部屋番号だけでなく、服用する曜日、服用機会、薬剤の名称、数量などが印字されており、薬は各患者の升目に入った状態で薬剤師が施設に持参する。このため、施設の看護師などは薬剤管理の労力や配薬の手間が省け、升目に薬が入っているかどうかをチェックするだけで済む。トレーには朝服用する薬が入ったものは赤、昼は黄色、夜は青などと色が決まっており、一目で分かるようになっている。

●薬は全てを一包化せず、一部を別包に

薬は全てを一包化せず、下剤や睡眠導入剤などはそれぞれ別包にして1剤ずつ薬袋に入れている。これらの薬剤は看護師など施設のスタッフが患者の状況を見た上で、ときに服薬を見合わせることもある。全ての薬を一包化していると、スタッフもどの錠剤が何の薬なのか分からなくなり、薬局に電話で問い合わせても、白くて丸い同じような錠剤ばかりでは薬剤師も正確に伝えるのが難しい。

このため、同社ではこれらの薬剤を別包にして、薬包に書かれた薬剤名を伝えるだけで分かるようにしている。ほかにも多くのノウハウを保有しており、顧客の薬局などに提供している。
